

〔研究余録〕

二枚の絵は誰が描いたのか

―青森開港及開市二百八十年祝賀会紀念「青森市全図」―

工藤 大輔

はじめに

青森市民図書館歴史資料室では、明治三十九年（一九〇六）五月二〇日付で青森市役所が発行した「青森市全図」（縦四八・五cm×横六九・五cm）を所蔵している（図1）。この地図は表面下部中央に「青森開港及開市二百八十年祝賀会紀念」と記されていて、発行日と同じ日に青森市内合浦公園で開催の同祝賀会との関係性をうかがわせる。

また、表面には青森市の地図が中央に配置され、その下部右側には「千年前ノ青森及安瀉（図2）」、左側には「二百八十年前ノ青森（図3）」と題された絵が配置されている。そして裏面には「青森市統計一斑」が印刷されている。そもそも明治期の青森市街図は残存数が少ないのでこの地図、そしてそこに記されている文字情報が貴重なものである。ことはいうまでもない。一方、二枚の絵については歴史資料としては特段有効性がないことから、これまでまったく注目してこなかった。

しかし、改めてこの祝賀会に関する史料を読み進めていったところ、二点の絵は青森県の美術史において貴重な資料である可能性があることが判明した。そこで小稿では、この祝賀会がいかなるものであるのかということと併せて、二枚の絵の可能性について述べていくことにしたい。

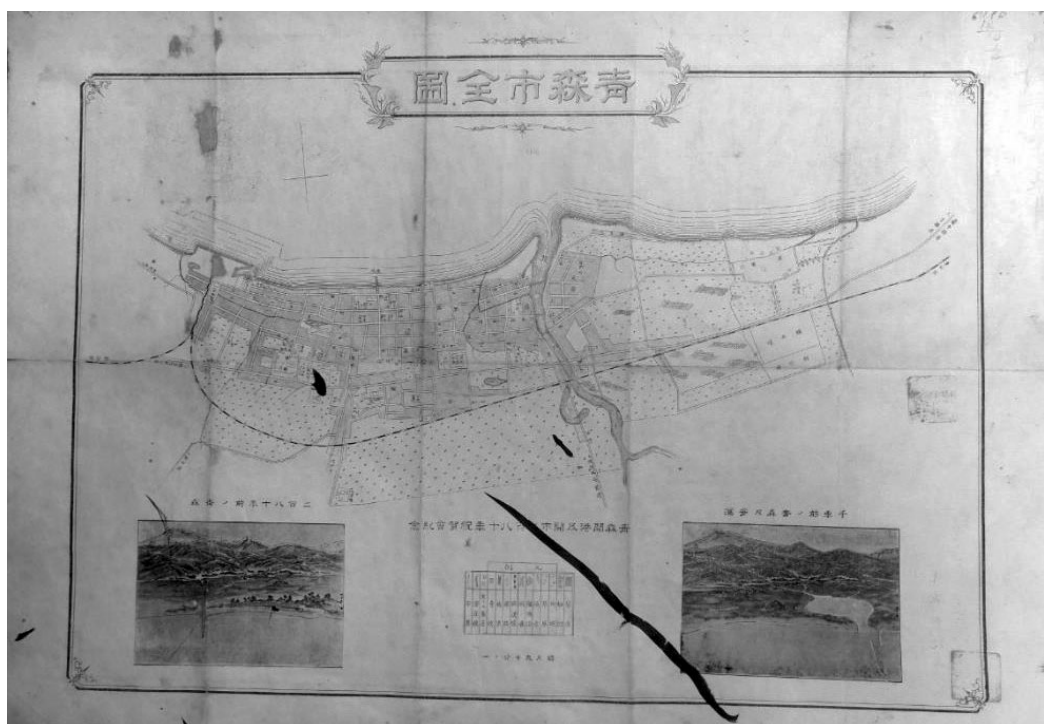


図1. 青森市民図書館歴史資料室蔵「青森市全図」（青森市役所 1906年 5月20日発行）

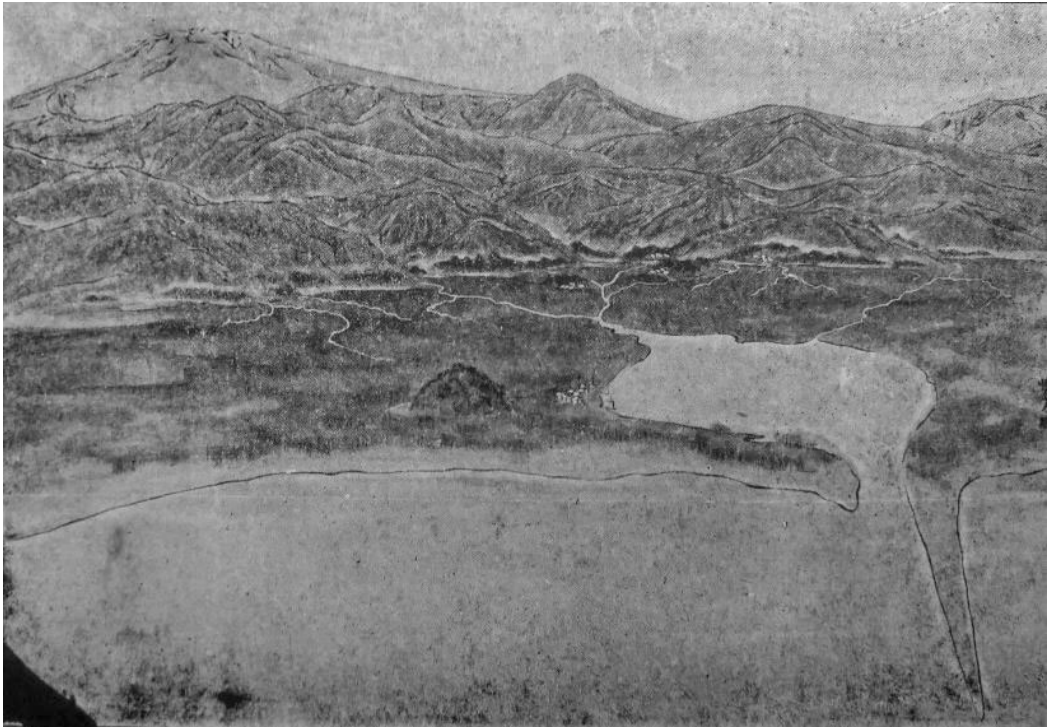


图 2. 千年前ノ青森及安瀉

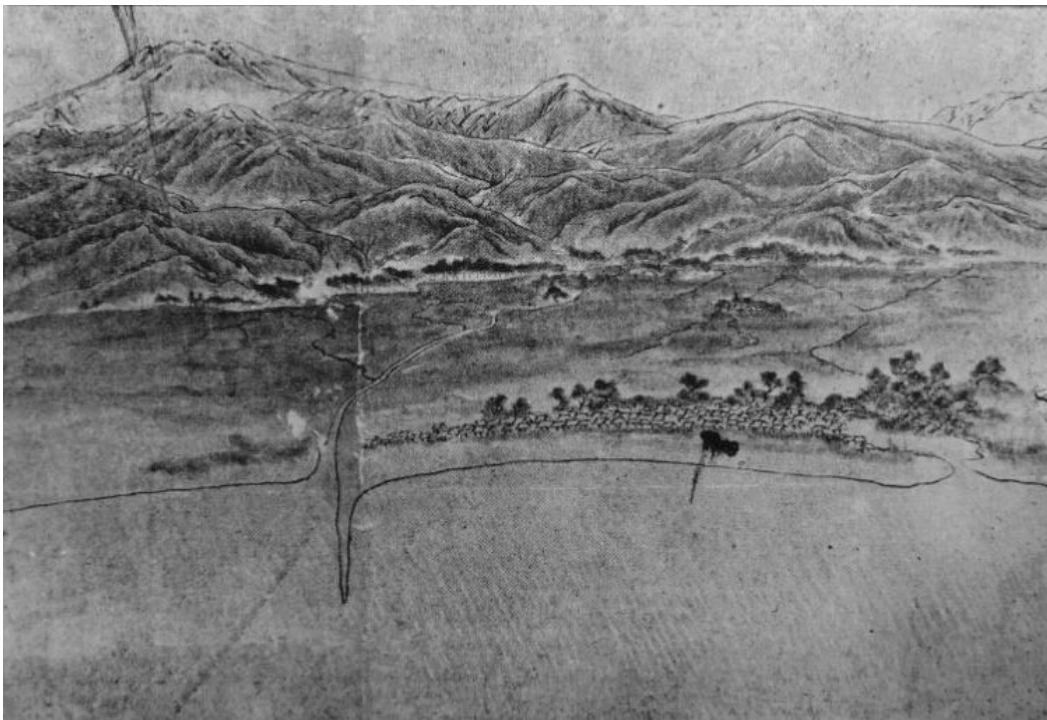


图 3. 二百八十年前ノ青森

一 「開港及開市二百八十年祝賀会」企画の背景

繰り返しになるが、明治三十九年（一九〇六）五月二〇日、青森市は市内合浦公園を会場に「開港及開市二百八十年祝賀会」（以下、「祝賀会」と略記）を開催した。ここでいう「開港」とは、同年四月一日をもって青森税務署内に函館税関青森出張所が開設となり、青森港が特別貿易港に指定されたことをいう。明治二五年頃から盛んになってきたとされる同港の開港論・開港運動は、ここに結実したのであった。¹一方、「開市」とは青森市の歴史叙述の位置付けでいうと近世前期、十七世紀前半の「青森開港」、すなわち青森の「町立て」をいう。つまり、青森の町立てが始まって二八〇年という年月が経過したというのである。ただし、それは明治三十九年を遡って二八〇年ということではない。

そもそも「開市二百八十年」というのは周年行事としてはいささか座りが悪い。だから、祝賀会は「おそらく開港祝賀会に合せた催しと考えられよう」と最新の研究成果でもある『新青森市史』通史編第三巻は評価する。一方、前年の明治三十八年七月二二日付の地元新聞『東奥日報』は、「青森開市二百八十年／紀念会を挙行すべし」の見出しで、国内外で実施している都市の周年記念行事を青森市でも開催すべきであると主張しているのである。しかも、そうした周年行事は「其時期を選ぶを要す、而して其時期たる、五若くは十の數に於てするを適當にして且つ普通なりとす」と認めつつも、青森市が「開市二百八十年（明治三十八年）」の行事を行うことは「其時にあらずと雖とも、而かも時振古未曾有の大

事に逢着し、国威八紘に赫き、本市の前途洋々春海の如きに於て、二百八十年祭を挙行して人心を喚起せんと欲す」とその意義があることを強く表明している。

なお、ここにいう「時振古未曾有の大事に逢着し、国威八紘に赫き」とは日露戦争、とくにこの戦争の最終局面で青森を兵站基地として行われた樺太攻略戦を強く意識したものとみられる。ところで、祝賀会が終わってから関係者がまとめた報告書の記録に「青森開港及開市二百八十年祝賀会記」（以下、「祝賀会記」と略記）がある。³これには同年十二月十八日付で市会議員柏原彦太郎のほか上田幸兵衛・藤林忠兵衛が連名で青森市参事会に対して提出した意見書が掲載されている。そしてその冒頭は

生等は今年十月二十六日、同三十日貴会に到り青森市開港二百八十年及日露戦争紀念会を貴会の發起に因つて以て併挙せられんことを
樓述せり、爾來二閱月杳として其企画あるを聞かず、

というもので、有志者が「青森市開港二百八十年及日露戦争紀念会」の發起を市参事会に求めていたことが分かる。さらに、青森商業会議所においても翌明治三十九年一月二七日付で、建議者石塚源吉、賛成者柏原彦太郎・広瀬孝作が連名で会頭大坂金助に対して「青森市開港二百八十年及日露戦争紀念実業展覽会挙行を市参事会へ交渉の件」を建議した。⁴これを受けて大坂会頭は委員を五名指名し、これらの委員で検討されたものとみられる。その結果が四月二日に報告され、

一、青森市開港二百八十年祭及特別輸出入港祝賀を開くことを市参事会に交渉すること、其方法と時期とは可成速かに挙行すること

を役員及三名委員に一任すること、⁵⁾

と、ここで「日露戦争」の文言が消え「特別輸出入港」に置き替わることになったのである。つまり、今回の祝賀会は明治三八年秋までに、開市二八〇年と日露戦捷の記念行事としてそもそも企図されたものであった。しかし翌年四月一日に青森港が特別貿易港に指定されることになり、日露戦捷は後景に退くことになったのである。

こうして青森商業会議所が主導し市参事会と交渉に入ることになるが、市側は当初、四月上旬において

市にては二百八十年記念は兼ねず単に今回開港に就て祝賀会を開らくこととし、本月下旬か来月上旬市会を開らき之を附議し開港の期日及び其の方法を決定する筈、⁶⁾

とあくまで開港を記念しての行事と考えていたようだ。しかし、新聞の報じるところによれば、四月十三日の市会で芹川得一市長は同年度の歳入追加案として

千二十四円八十三銭壹厘の追加をなし市公費となすの案なるが、芹川市長は之れ市に於て近く特別開港祝賀及開港二百八十年記念会を行ふ計画に要するものなりと説明し、⁷⁾

とあり、ここで「開港二百八十年（開市二百八十年と同義）」の文言が現れ、その後は「開港及開市（二百八十年）」という表現に落ち着き、市側も「開市」を含めた行事として準備を進めることになった。

二 祝賀会をいつやるか―五月二〇日は「一大恨事」

祝賀会の期日について市参事会は、当初は五月一日を念頭に市会でもって確定する腹づもりでいたようだ。⁸⁾しかし、来賓として招待されることが予想される知事の都合も考慮すると、五月中旬の日曜日とするのではないかというのが新聞の見立てであった。⁹⁾そして、芹川市長は四月二五日に青森市公会堂で、祝賀会に向けて新規に囑託した各町の委員を前に未確定ではあるものの第二日曜日である五月十三日を期日とする意向を示したようだ。¹⁰⁾しかし、五月二日の準備委員会で五月十五日と決定し、「日曜日を希望せし多数は遂に失望せざるを得ずなれり」ということになった。

実は、日曜日ではない五月十五日を主張した少数派にとつて、「開市二百八十年」を祝うには「五月十五日」という日付は特別な意味があるのである。すなわち、「我青森の始て江戸間回漕船通航を許されたるは実に寛永二年五月十五日に在り」ということなのである。この寛永二年五月十五日とは、弘前藩二代藩主津軽信枚が、津軽から江戸への廻船運行為許可する江戸幕府年寄衆土井利勝と酒井忠世の連署奉書を拝領した日であった。そして、この江戸幕府年寄衆連署奉書にこそ「青森開港のきっかけがあった」と現在位置付けられ、当時においてもさきの明治三八年七月二日付の『東奥日報』に明らかのように、この文書を背景とする寛永二年が「開市二百八十年」の起点となっていた。したがって、多数派ではないものの五月十五日という彼等の主張は、青森市の歴史的背景を踏まえた上でなされたものであったといえる。

しかし、最終的には五月二〇日となった。それは、来賓として出席することになった松岡康毅農商務大臣の都合による変更であった。¹⁴⁾した

がつて、五月十五日にこだわる人々にとつては、

開市二百八十年祝賀会期日を初め五月十五日と協定せしが、松岡農商務大臣の臨場あるの故を以て遽かに二十日に変更せるは本会の一大恨事と云ふへし、¹⁵⁾

というものであり、「素定の期日の暗に歴史的記念日に吻合せるに開催するを得ざしりは、市民の齊しく憾みとする所なり」であつたのである。ともかく、わずか一か月半ほどの準備期間で祝賀会は開催されることになつたのである。

三 来会者への配付物―二枚の絵の作者は誰か

祝賀会の骨格は、四月十七日午後二時から開かれた準備委員会でできあがつたようだ。ここのところを四月十八日付の『東奥日報』の記事から紹介しよう。¹⁷⁾ まず、会場は合浦公園で、式典のほかにも来賓をもてなすため茶菓子・蕎麦などの模擬店を出すことになつた。模擬店は「市内の各銀行・会社、回漕業、其他各商工業団体に交渉し」これらの企業・団体の「寄附」による出店とした。

さらに、余興として花火の打ち上げなども実施され、会場以外でも「市中一般に祝意を表して戸毎に国旗、若くは球灯を吊するなど」の装飾を施すことになり、まさに「兎に角当日は単純なる祝賀の宴会のみならず、市内の附景氣を以て盛んに祝賀の意を表する」一大イベントになることが期待された。そしてこの時、

○青森案内の配付 当日は来賓の爲めに市の略図、重なる場所を印

刷したるもの及市況一斑を印刷したるものを配付する筈なりしが、尚ほ部類を増加して来賓の外にも配布するの計画あり、現市の略図の外二百八十年前開市当時の図をも加ふる筈にて、市内重なる箇所は写真版とし、一見市の景況を知るの便に供するとのことなり、

二八〇年前の図と市内の主な場所の写真版を入れ込んだ「市の略図」と「市況一斑」を印刷したものを来賓を含めた参会者に配付することも決定した。これが小稿でいう「青森市全図」になつていくもので、一週間後の四月二五日に開催の準備委員会では「目下調製準備中」と報告されている。¹⁸⁾

そして祝賀会当日、参会者は合浦公園の門から会場に入り受付で「案内状若くは会券を引換へに徽章及市寄贈の青森市内全図、同統計一斑、記念歌、其他各所よりは寄贈の絵はかき等を配布され」ることになつた。なお、来賓にはこのほか「絹地ハンカチーフ」も手渡されたようだ。²⁰⁾

ところで、さきに紹介の四月十八日付『東奥日報』によれば、配付予定の「市の略図」には「二百八十年前開市当時の図」が添えられることになつていたとあるが、当日に配付されたものには「十年前ノ青森及安瀉ノ図」と「二百八十年前ノ青森ノ図」のふたつが配置されていたという。²¹⁾そして、現存する「青森市全図」にもこのタイトルで二枚の絵が配置されている。では、この絵は誰が描いたものなのだろうか。「青森市全図」の二枚の絵のそれぞれ右端には小さく作者のものと思われる二文字の署名があり、その一文字目は「得」と読めそうだ（二文字目は読めず）。

さて、当日の会場にはさきに紹介した模擬店のほか、書画・骨董・写真・活花などの「展観場」が設けられた。これらのうち、書画のブース

には「大和田氏洋画にて揮毫の青森二百八十年前及一千年前の地図」が
 出展されていた。「青森市全図」の二枚の絵とほぼおなじタイトルであ
 る。

この「大和田氏」とは、高知県出身で明治三二年（一八九九）二月に
 県立青森第三中学校（のちの県立青森中学校、現県立青森高等学校）に
 赴任した大和田徳治²³であると見立てている。大和田は祝賀会が開催され
 たまさに同三九年五月、青森県内ではじめての洋画の研究会とみられ
 る洋画研究会を学内に設立していた²⁴。「大和田氏洋画にて揮毫」とい
 う出展の絵に関する記述とも矛盾はないし、署名の「得」字もあり得ない
 ものではない。したがって、祝賀会に出展されていた「青森二百八十
 前及一千年前の地図」の二作品は大和田徳治によるもので、これらが
 「青森全図」にも写真版として使われたのではないかと考える。これが
 妥当であるとすれば、「青森全図」のふたつの絵は、歴史資料ではなく
 美術（史）的な位置付けにおいて評価されるべきものといえよう。一方、
 この大和田の作品は青森市側の依頼によるものであったか否かは分から
 ない。ともかく、「市の略図（青森市全図）」作成が準備委員会で決定し
 たのが四月十七日、「青森市全図」の奥書によれば印刷は五月十日であ
 るから、わずか一か月足らずで大和田は作品を仕上げたことになる。

なお、「二百八十年前ノ青森ノ図」「千年前ノ青森及安潟ノ図」を敢て
 歴史資料として評価するならば、『目で見る青森の歴史』²⁵などに描かれ
 る「堤川開鑿」前と後の比較図の構図（図4）に影響を与えたとみられ
 よう。もちろん、安潟が「堤川開鑿」によって縮小したとする「堤川開
 鑿」は、実証性を伴わない仮説に過ぎないが²⁶。

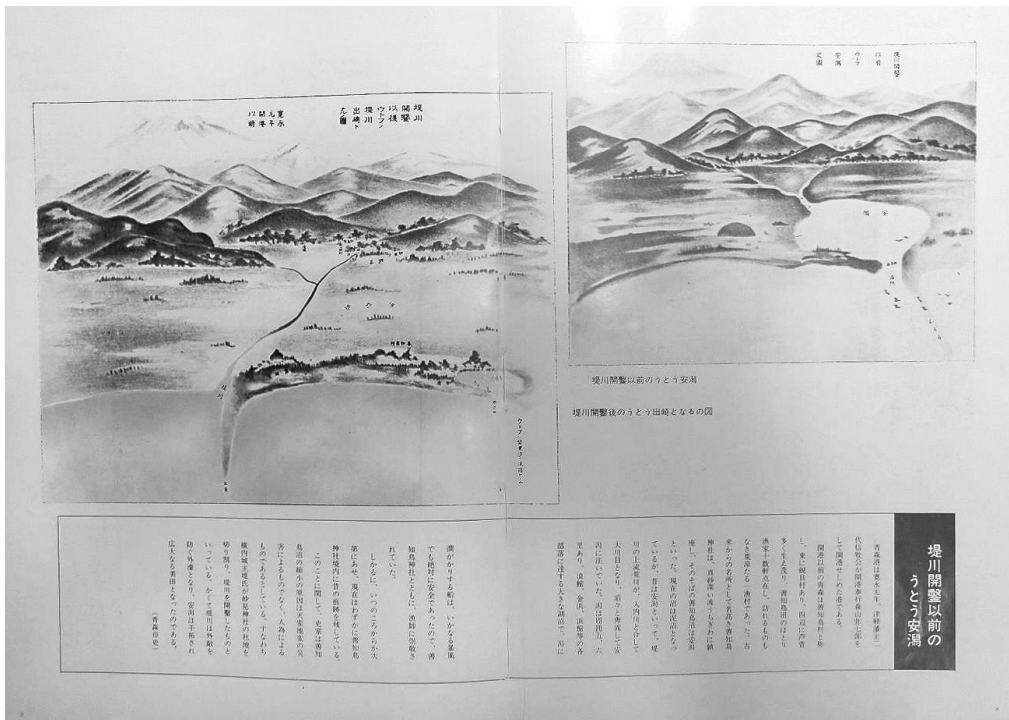


図4. 『目で見る青森の歴史』（青森市役所 1969年）

むすびにかけて―地域の周年行事を後世に伝える

青森市の「開港」と「開市」を記念して開催された、明治三九年（一九〇六）五月二〇日の祝賀会は盛会の裡に終ったようだ。現在、この祝賀会を伝える資料は個別の新聞記事を除くと、小稿においてたびたび引用した「祝賀会記」と、今回紹介の「青森市全図」だけのようだ。とくに前者は二〇年後の三百年祭に向けた資料という意図でもって編まれていた。また、こうした記録に目を通しておかなければ、「青森市全図」が祝賀会の参加記念品であったことに気づくこともないだろう。ましてや、小稿で検討した二枚の絵にまで思いが至ることもあるまい。

さきにも述べたように、「開市二百八十年」というのは周年行事としてはなんとも座りが悪い。しかし、当時の青森市民はこれを大きな喜び・誇りとともに実現した。そして、なかにはそれを後世に伝えたいと思う人々も出てきた。それが「建碑」の運動となった。「祝賀会記」の最後に「建碑」についてつぎのように記している。

◎建碑

開市二百八十年の市民祭は予期以上に出て寔に空前の盛観を極めたり、惟ふに是れ市民か燃ゆるか如き愛郷心を遺憾なく表顕したるものので誇りとするに足る、然りと雖とも歳月は動もすれば事実を湮滅するの虞なきにあらず、星移り物換り他年幾世の後果して此光輝ある事実を保留するを得へき乎、是れ吾人の憂慮して止む能はざりし所、於是乎、五月一日有志公会堂に会し其保留法を商議せしに、

宜しく銅碑を立て以て後昆に伝ふべしと決し、直ちに上田幸兵衛・藤林忠兵衛・平井重次郎・柏原彦太郎・大坂金助・木村文次郎・樋口喜輔・梅津文四郎・石館喜久造氏の九名を挙げて委員と為し其方法を托したり、委員亦負託の重きを感じ其設計を案じ、東京美術学校図案科教授千頭庸哉氏に囑托せり、思ふに其成る蓋し遠きにあらざるへし、嗚呼巍乎たる銅碑合浦公園松緑りに風清らかなる間に屹立し、銅影依稀山河と其秀を競にあらん歟、市民の築を此の地に曳くもの低回顧望当年を偲はざらんと欲するも豈得へけんや、是れ実に始めあり、終りあるものと云ふへきなり、

この記事によれば、五月一日に有志が顔を揃え「銅碑」を建てることに決めたようだ。委員に名を連ねるのは、商業会議所会頭を務めている大坂金助のほか、明治三八年十二月に市参事会に「青森市開港二百八十年及日露戦争記念会」に関する意見書を提出した上田・藤林・柏原の三名、さらに平井・樋口・石館は市議員である。錚々たる顔ぶれといつていいだろう。

一方、『東奥日報』もしばしば建碑に関する記事を載せており、それによるとこれら有志は中央停車場設置期成同盟会のメンバーで、彼等は中央停車場建設のために集めた寄附金二〇〇円余を全額市に寄附して記念碑建立を計画したとある。しかも、「祝賀会記」に記された碑の設計を「東京美術学校図案科教授千頭庸哉氏に囑托せり」に関しても、予算一〇〇〇円、二〇〇〇円、三〇〇〇円の三案で依頼しすでにその代金三〇〇円を支払っているという。市には同美術学校から送られてくる設計書とこの期成同盟会が集めた金を寄附するつもり⁽²⁶⁾のよう⁽²⁷⁾だ。

さらに「祝賀会記」によれば、そう遠くない時期に当時の石碑建設のメッカともいべき合浦公園内に碑が建つことが予想されるが、『東奥日報』によれば十一月末の時点ではまだ建っていない²⁹。そして少なくとも現在この碑は存在していない³⁰。

祝賀会開催の意図の部分も含め、これにまつわる当時の人々の想いは、自治体史の記述などを通覧しても残念ながら一二〇年後の人々に掬い取ってはもたえてはいないようだ。一方、令和四年(二〇二二)四月一日、青森県観光物産館アスパムの十三階に「ステンドグラス風ねぶた絵」と称するアート作品が一般に公開された。これは、小稿での表現を使うと間もなく迎える「開市四〇〇年」を記念して製作されたものであるという³¹。さらに今後「開市四〇〇年」に絡んだ催し物が企画されていくという話も耳にしている。青森市のこの周年行事には市民のどのような想いが込められ、そして五〇年、一〇〇年先の市民に伝え残されていくことになるのだろうか。

註

- (1) 『新青森市史』通史編第三卷(青森市、二〇一四年、二九六〜三〇三ページ)。
- (2) 同右、三〇三ページ。
- (3) 弘前市立弘前図書館一般郷土資料。
- (4) 同右。
- (5) 同右。

「一任」された「三名委員」は大坂会頭が指名した五名から選ばれたとみられるが、具体的に誰であったかは分からない。

- (6) 明治三十九年四月七日付『東奥日報』。
- (7) 明治三十九年四月十四日付『東奥日報』。
- (8) 明治三十九年四月十一日付『東奥日報』。
- (9) 明治三十九年四月十八日付『東奥日報』。
- (10) 明治三十九年四月二六日付『東奥日報』。
- (11) 明治三十九年五月三日付『東奥日報』。
- (12) (3) におなじ。
- (13) 『新青森市史』通史編第二卷(青森市、二〇一二年、三ページ)。
- (14) 明治三十九年五月六日付『東奥日報』。
- (15) (3) におなじ。
- (16) (3) におなじ。
- (17) (9) におなじ。
- (18) 明治三十九年四月二六日付『東奥日報』。
- (19) 明治三十九年五月二二日付『東奥日報』。
- (20) (3) におなじ。
- (21) (3) におなじ。
- (22) (3) におなじ。
- (23) 對馬恵美子「青森県における明治期の美術」(『青森県立郷土館研究紀要』33、二〇〇九年、八一ページ)。
- (24) 同右、七八ページ。
- (25) 青森市、一九六九年(八〜九ページ)。
- (26) 工藤大輔「あなたは地域の歴史に興味はありますか〜歴史的事実と伝承の間に〜」(『平成29年度青森学術文化振興財団懸賞論文受賞論文集』二〇一八年、二三〜二四ページ)。
- (27) 鉄道開通当時の青森停車場は市内西側の安方にあつたため、乗降客のみならず商業上にも不便があつた。そこで、停車場を市の中央部に設置

することを求める目的で明治三四年二月に組織された団体（明治三四年二月二日付『東奥日報』）。

ちなみに、新しい停車場は同三九年九月に新町通り側に移転となり、期成同盟会の目的は達成しなかった。彼等がその活動で得た二〇〇円余を建碑の費用に回し得たのは、同年五月の時点で「最早中央停車場の望みなければ」（明治三九年五月三一日付『東奥日報』）という状況にあつたからである。

(28) 明治三九年五月三一日付『東奥日報』。

(29) 明治三九年十一月二七日付『東奥日報』。

(30) 岩藤卯一郎氏が昭和十年頃に行った合浦公園内の石碑調査の報告においても該当する石碑は載っていない（岩藤卯一郎「合浦公園内の碑文」『郷土号』第四号、青森県師範学校校友会、一九三六年）。

(31) 「青森開港40年 ステンドグラス風ねぶた絵」解説文。

（くどう・だいすけ 青森市民図書館歴史資料室長）